

# 平成25年度 学校評価自己評価書

愛知教育大学附属岡崎小学校

## 1 総括

### (1) 教育目標

- ① 生活のなかから問題を見つけ、自ら生活を切り拓いていくことのできる児童の育成  
→「生きる力」の育成（生活教育の発展と充実）
- ② 経験や体験を重視し、事実をもとに問題の解決を図ろうとする児童の育成  
→問題解決能力の育成
- ③ 友だちの気持ちを思いやり、互いに磨き合おうとする児童の育成  
→共存の意識にたった人間関係の形成

### (2) 中長期経営目標

- ・ 自由で自立した人格の育成と社会的責任の自覚を養う。
- ・ 児童の多様な能力に対応した教育を行うとともに、個性を尊重しつつ学力の向上を図る。
- ・ 大学と連携し、子ども一人一人の個性と生活体験を大切にした「生活教育」についての教育研究を行う。
- ・ 安全で安心な教育環境を整備し、安全・健康教育を進める。
- ・ 国立大学法人附属学校として、大学と連携した学校マネジメントを推進する。
- ・ 機能的な学校運営を行うとともに、教職員の職能向上に努める。
- ・ 開かれた学校づくりを進める。
- ・ 学校の様子や状況について、家庭や地域に積極的に情報提供し、学校評価を学校運営に生かす。

### (3) 短期経営目標（本年度の重点目標）

#### ① 学習指導

- ・ 基礎的・基本的な知識・技能の習得を図る。
- ・ 各教科・くすのき学習で位置づけた育みたい子どもの力を培う授業展開を図る。
- ・ 他者とのかかわりやつながりのなかで自らの問題を解決し、互いに高め合える子どもの姿をめざす。
- ・ コンピュータなどの情報機器の有効な活用方法を探るとともに、正しい判断のなかで、情報活用できる能力を育成する。

#### ② 研究

- ・ 新たな時代の生活教育を探るなかで、各教科・くすのき学習におけるめざす子どもの姿や教科論を確立する。
- ・ 問題解決的な学習を展開するなかで、子どもの問題意識を大切にし、多面的かつ総合的なものの見方や考え方、感じ方を育む授業あり方を探る。
- ・ 大学と連携し、通常学級における特別支援教育や教育相談の体制整備を図り、支援のあり方を探る。

#### ③ 教育実習

- ・ 教育実習生に対し、教育活動の基本的なあり方を具体的な実践を通して指導する。

#### ④ 学校運営

- ・ 学校評価をもとにした改善点を点検しながら、よりよい学校運営をめざす。
- ・ 行事の精選・スリム化を図り、授業時間を確保する。
- ・ 勤務時間の短縮及び業務の精選・効率化をより進め、教職員の健康維持を図るとともに、タイムマネジメントの意識を高める。

## 2 自己評価の実施体制

学校が経営目標を立て、具体的な実践を行い、その成果や課題を次年度の学校経営方針に反映し、教育活動を改善するというPDCAサイクルに基づく学校評価を実施する。この学校評価を継続的に改善していくためには、目標を適切に改善していくことが必要である。そのために、本校では学校全体の教育目標とともに、めざすべき成果やそれに向けた取り組みに関する中長期と単年度の目標を具体的に設定している。

本年度実施した評価項目については、短期経営目標（本年度の重点目標）をさらに具体化して設定した。また、昨年度見直された評価項目を継承・継続的に評価することで、教育活動の成果や問題点を浮き彫りし、改善を図ろうと考えた。また、短期経営目標（本年度の重点目標）の成果や課題をより明確にするために、情報教育について、情報の活用に視点をあてた評価項目を設定した。さらに、問題解決学習を継承しているうえで欠くことができない、粘り強く問題解決に向かう子どもの姿といった研究分野の評価項目も継続設定し、分析することで、これからの研究の方向性を模索する一助としたいと考えた。

アンケート調査の実施（実施時期 7月5日（金）～12日（金））については、①保護者 ②児童 ③教師を対象に行った。設問は20問とし、個人情報保護の観点から匿名性の担保に配慮した。

### 【平成25年度 実施評価項目】

- ① 附属小学校への満足度
- ② 子どもの主体性の伸長
- ③ 子どもたちの人間関係（H24新規項目）
- ④ 楽しい学びの保証
- ⑤ 子どもの理解（日記・話を聞く姿勢）
- ⑥ 子どもの理解（スクールカウンセラー・アイリスパートナーを含む）
- ⑦ スピーチによる「聴く力」「話す力」の向上
- ⑧ あおいタイムや授業のなかでの「読む」「書く」「計算」などの基礎的な知識・技能の習得
- ⑨ 問題解決能力の向上
- ⑩ 英語活動の充実
- ⑪ コンピュータや本から得た情報の活用能力（H25内容変更）
- ⑫ 自校給食がもたらす子どもへの影響（食育）（H24新規項目）
- ⑬ 給食指導（配膳，会食，片付け）の指導
- ⑭ 健康・安全に対する配慮
- ⑮ 基本的な生活習慣（あいさつ・時間・ものを大切にする）の定着
- ⑯ 清掃活動の指導
- ⑰ 学校施設・設備・教室環境への留意
- ⑱ 学校での出来事の公開（HP，学級・学年通信などの充実）
- ⑲ 危機管理意識（昨年度文言を変更）
- ⑳ 学校評価をもとにした学校運営の改善
- ※ タイムマネジメントへの意識（教員のみ）

## 3 評価結果（「よくあてはまる」、「ややあてはまる」の合計の割合で判断した）

100%～80% :::: A	80%～70%以上 :::: B
70%～50% :::: C	50%未満 :::: D

「よくあてはまる」、「ややあてはまる」の合計の割合で判断した理由は、以下の3点である。

- ① 「よくあてはまる」「ややあてはまる」「あまりできていない」「できていない」のいずれかを選択する形で行っている。教育活動において、「よくあてはまる」「ややあてはまる」の割合の多いことは、教育活動が円滑に行われていることを示すと考える。また、「あまりできていない」「できていない」の割合が多い評価内容の原因を分析し、緊急性や重要度を吟味したうえで、教育活動に反映させたいと考える。
- ② 昨年度との傾向の違いを比較をするためにも、この方法を継承する。

- ③ 評価対象となっている「保護者」「児童」「教師」の意識の違いからも、教育活動に対する意識や方法のあり方を探ることができると思う。

## 4 考 察

### (1) 全体評価

設問1「附属小学校は、誇れる学校である」は、毎回のアンケートで高い数値を示している。特に保護者、児童が自分の学校に誇りをもっていることは、本校の進める教育活動に理解を示す保護者、学校生活が充実している児童を数値として表している。また、設問2「附属小学校は、子どもの自主性や主体性を育む教育を実践している」においても同様の評価であり、本校で進めている、授業のなかで子どもたちが楽しみながら主体的に問題を解決できる力を身につける授業づくりの成果であると思う。ただ、設問3「人とのかわりを大切にしたい子どもの指導」、設問4「授業づくりの工夫」、設問5「一人一人の子どもを大切にする教師の姿勢」、設問7「スピーチによる聞く・話す力の育成」、設問9「粘り強く工夫しながら問題解決する力」設問11「情報によって得た知識の活用」、設問12「食事を作ってくれる人への感謝の意識」、設問18「校内のできごとの伝達」の8つの設問について、保護者や児童の割合が高いものの、教師の割合がB～Dとなっている。これは、教師自身が学校行事や学校生活・授業で見せる子どもの姿に満足することなく、さらなる高みをめざしていると思う。一方で、ここ数年、子どもをより大切にしようと、子どもたちとかわる時間を生み出すために、業務精選と見直しを図ってきた。そうした流れのなかでの設問5のような結果を踏まえると、その原因の究明を急ぐ必要がある。

また、設問6「スクールカウンセラーやアイリスパートナーの活用」、設問13「ていねいな給食指導」について、昨年度と比較し保護者の割合が下がっているのは、学校公開や授業（給食）参観、通信、ホームページなどを通し、学校の教育活動が保護者のなかに理解されるなかでの、教員に対する期待の表れだと思う。反対に、設問8「基礎的・基本的な知識・技能の定着」、設問9「粘り強く工夫しながら問題解決する力」、設問17「安全な学校設備や教室環境づくり」については、昨年度と比べ、保護者の割合が上がっている。このことから、本校が開かれた学校づくりをしている成果と耐震工事が行われるためだと分析する。

教育目標に則し、短期経営目標（本年度の重点目標）をさらに具体化して設定した20項目の設問に対し、保護者及び児童にAの割合が多く見られることから、本校の教育方針、教育活動に対し、多くの保護者からの理解を得ており、教師は自信をもって教育活動を進めてよいと思う。

### (2) 本年度の修正項目と結果

昨年度、設問11「子どもは、わからないことや知りたいことがあったとき、コンピュータや本を使って、進んで調べるようになってきた」として、子どもが疑問を調べる際にどのような方法を使うのかを調査していた。この設問について、児童の割合をみると、平成23年度及び平成24年度で大きくなかった。これは、発達段階に応じ、子どもたちが調べる方法を選択している結果だと分析すると同時に、本年度の重点目標(3)短期経営目標（本年度の重点目標）①学習指導「・コンピュータなどの情報機器の有効な活用方法を探るとともに、正しい判断のなかで、情報活用できる能力を育成する。」に着目した。そこで、本年度は、項目11の文言を「子どもは、人に聞いたり、コンピュータや本などを使って調べて得たことを、普段の生活のなかで役立てようとしている。」とし、情報によって得た知識などを生活場面で子どもたちが活用しているのかという視点での設問を設定することとした。そのうえで結果を分析し、課題を明確にすることが、今後の本校の教育活動を見直すことに直結すると思った。

保護者……子どもは、人に聞いたり、コンピュータや本などを使って調べて得たことを、普段の生活のなかで役立てようとしている。

児童……人に聞いたり、コンピュータや本を使ったりしてわかったことを、他のこ

とに役立てようとしている。  
 教師……各教科やくすのき学習などで子どもが調べたことを，他の教科や生活のなかで活用できるよう，その機会を設定している。



情報活用能力	
設問項目	設問 11 情報活用能力 教師：今年度C 56.5% 保護者：今年度A 82.4% 児童：今年度A 87.3%

保護者及び児童の評価は，A評価となっている。児童は調べることで得た情報（知識・技能）を生活のなかで活用しているという自負があり，保護者もそうした子どもたちの生活の様子をとらえているからこそその評価であると言える。一方，教師の評価はCにとどまっている。それは教師が子どもたちが調べて得た情報を生活のなかで生かす（活用）ためのきっかけ作りに対する方策がまだまだ不十分だと厳しく自分を見つめているからではないか。また教師が，「生活に生きてはたらく力を養う問題解決学習」の意義や意味を十分理解しているという見方もできる。これらのことを踏まえ，**今後は調べて得た情報（知識・技能）が，実際の子どもたちの生活のなかで生きてはたらく（活用されていく）ものとなるような教育活動やわたしたちの営みを探っていく必要がある。**

### (3) 昨年度の改善対策と今年度の結果

#### 【昨年度の課題とその対策】

- ⑥ 子どもの理解（スクールカウンセラー・アイリスパートナーを含む）
- ⑧ あおいタイムや授業のなかでの「読む」「書く」「計算」などの基礎的な知識・技能の習得
- ⑫ 自校給食がもたらす子どもへの影響（食育）（H24新規項目）
- ⑯ 清掃活動の指導

#### ア ⑥子どもの理解（スクールカウンセラー・アイリスパートナーを含む）

一人一人の子どもが，楽しく安心して学校生活を過ごすことができることを私たちは望んでいる。また，学校は子どもを安心して通わせられるという保護者との信頼関係を築いていくことが大切である。子どもの悩みや保護者の悩みを積極的に聞き，解決のために全校体制で取り組んでいく必要がある。

本校の子どもたちは，明るく，活発に学校生活を送っているように見える。しかし，仲間と良好なかかわりができていないと考えている子どもも，少なからずいることが今回のアンケートからわかった。また，保護者においても，子どもに対する悩みや親子関係の悩み等を抱える方がいる。学校として，子どもたちや保護者が気軽に相談できる体制をつくっておくことが大切である。



⑥ 子どもの理解（スクールカウンセラー・アイリスパートナーを含む）	
改善策	①通信や掲示を活用し，アイリスパートナーの活動を全校に周知する。 ②学年主任，担任とスクールカウンセラー，アイリスパートナーとの連携を充実させるにあたり，報告用紙の活用や情報の電子化（セキュリティの保証を

	含め)による共有化した後、情報交換の場を明確に位置づける。 ③相談室の環境整備などを進め、効果的な運用を図る。 ④特別支援教育推進委員会を中心に、大学の関係機関や地域の診療・相談機関とも連携を模索し、より効果的な運用を協議・実践する。
数値	設問 6 スクールカウンセラーやアイリスパートナーを活用し、より深く子どものことをとらえ、成長に役立てようとしている。 平成24年度 平成25年度目標値 平成25年度数値 教師 B 70.8% → A 85% ⇒ C 52.1% 保護者 B 84.5% → ⇒ B 76.0% 児童 C 53.1% → B 75% ⇒ C 61.2%

**【改善策①について】**

アイリスパートナー通信を7月に一度発行した。年度当初の予定では、年度初めのできる限り早い時期に発行し、1学期間に2度は発行しようと考えていたができなかった。子どもの数値が61.2% (C)、保護者が76.0% (B)という評価になった大きな要因であると考えられる。ただ、スクールカウンセラーやアイリスパートナーの存在が保護者に定着し、その役割に対する期待度が低い評価となったともとらえることができる。①のような取り組みと友に、活動内容や活動のねらいについても児童及び保護者に周知できるよう、取り組んでいく。また、教員の評価が目標のAに届かなかった理由としては、アイリスパートナーが各クラスに固定して活動していたことがその要因として考えられる。アイリスパートナーの運用の方法についても合わせて検討していきたい。

**【改善策②について】**

1学期の取り組みとして、スクールカウンセラーからの情報をコーディネート役の主幹が把握し、担任に伝えるという方法が主となってしまった。担任との面談の時間については1度しか確保することができなかった。そのため、スクールカウンセラーと担任との双方向の情報交換ができなかった。また、アイリスパートナーとの情報交換については、報告用紙の活用を活用することはできた。しかし、情報の電子化(セキュリティの保証を含め)による共有化については、そうした取り組みを進めなかったため具現できていない。また、情報交換の場については、低学年の担任とは6限を活用し実施できたものの、高学年については児童下校後の会議と重なり、じゅうぶんな取り組みができなかった。その結果が教師の52.1% (C)に表れたと考える。したがって、アイリスパートナーの運用方法と合わせて双方向情報交換が図れるように、アイリスパートナーとの会話を重視する担任の意識を高めることや会議開始時間の調整等をしていく必要がある。

**【改善策③④について】**

相談室の備品などの充実は図ってきた。ただ、効果的な運用については難しさを感じた。相談に係る保護者および本人が多くなり、1学期末はスクールカウンセラーの予約でいっぱい状況である。特別支援教育推進委員会については、1学期の間に実施することができなかった。スクールカウンセラーの多忙な状況も含め、今後の大学・関係機関との連携についてのよりよいあり方を模索していく必要がある。

**イ ⑧ あおいタイムや授業のなかでの「読む」「書く」「計算」などの基礎的な知識・技能の習得**

子どもたちは問題を解決していく過程において、知識や技能を獲得していく。しかし、解決に向かうためには、基礎的な知識や技能の習得が必要となる。基礎的な知識や技能を身につけさせ、自信をもって、問題解決に向かわせていきたい。	情報収集はコンピュータの普及に伴い、とても容易になっている。また、情報は一方的に発信されているため、情報をどのように理解し、どのように利用していくかは、情報の受信者に任されている。情報を発信する場合においては、情報モラルの点から、子どもたちが身につけるべ
--	---

き力が多くある。



⑧ あおいタイムや授業のなかでの「読む」「書く」「計算」などの基礎的な知識・技能の習得	
改善策	①あおいタイムの充実及び、授業でも基礎的な知識・技能の習得を図る時間を確保するとともに、その成果を児童自身や保護者が確認できる機会を設ける。 ②全国学力状況調査の結果を保護者会などで伝える。 ③自分の必要な情報を効率的に得たり、共有したり、発信したりする情報教育の考え方を教師が共通理解し、毎日の授業と結びつけながら指導にあたる。 ④授業参観等でコンピュータを活用する授業を公開する。
数値	設問 8 基礎的な知識・技能の定着を図っている。 平成24年度 平成25年度目標値 平成25年度数値 教師 A 87.5% ⇒ B 78.2% 保護者 C 67.7% → A 80% ⇒ B 76.5% 児童 A 95.3% ⇒ A 89.5%

#### 【改善策①について】

上記とは若干ずれるが、算数の基礎的な知識の定着を図っているあおいタイム、聴く力・話す力の定着をめざしたスピーチについて、本年度は学校公開日に公開をした。実際に保護者にその様子をみていただいたことで、本年度は76.5%（B）という評価になったと考える。設定した目標値80%（A）を達成するために、**授業中の基礎的な知識・技能の習得を図る時間の確保及びその取り組みの成果が確認できる機会を設ける取り組みを行っていきたい。**また、児童の評価が若干ではあるが下がっている。教師の評価がAからBに下がったことを、教師があおいタイム及びスピーチの時間について、現状以上の取り組みをめざしているととらえると、**教師の描いているあおいタイムのあり方を具現することが必要ではないかと考える。**よって、あおいタイムのあり方について、学年内や学年間で情報交換を行うなど、学年主任を核とした取り組みをしていくという方法も考えられる。また、スピーチにおいては、担任が学級の現状をとらえ、短期目標を設定し、子どもたちがどの目標にどこまで迫っているのか、子どもたちに伝える営みを繰り返すことが大切ではないかと考える。

#### 【改善策②について】

全国学力状況調査の結果を保護者に伝えるという取り組みは、現時点で行っていない。本校児童の学力状況について、国や県の結果と比較して数値で表すことは、保護者にとって本校児童の現状を客観的に理解できることにつながると考える。**本年度の結果について、学年通信に掲載するなど保護者に伝える取り組みをしていく予定である。**（資料1参照）

#### 【改善策③④について】

3ページで述べたとおり、本年度は必要な情報の収集方法ではなく、収集した情報を生活のなかで活用しているかという設問に変更した。そのため、この改善策をもとに分析を行うことは妥当ではないと考え、分析は行わない。

### ウ ⑫ 自校給食がもたらす子どもへの影響（食育）

子どもたちの給食の実態をみると、簡単に給食を残したり、偏った栄養摂取をしている子どもがいる。しかし、栄養士さんは、栄養バランスや歯の成長、地域食材の活用など、毎日の献立に意図をもって作ってくださっている。

常に温かい給食を取っている子どもたちは、給食を作ってくれている人への感謝の

気持ちは忘れてはいない。しかし、給食を通して自らの健康を考えたり、食材と地域とのつながりを考えたりするなどの子どもの姿はあまりない。食育の生きた教材として自校給食の活用を検討していく必要がある。



⑫ 自校給食がもたらす子どもへの影響（食育）	
改善策	①給食委員会の活動を充実させ、給食を通して自分たちの健康を考えることができる機会を設ける。 ②食育を学ぶ場を設定し、栄養士さんや調理員さんが参加できる授業を運営を検討する。
数値	設問 12 附属小学校での自校給食のおかげで、食事を作ってくれる人への感謝の気持ちが育っている。 平成24年度 平成25年度目標値 平成25年度数値 教師 C 66.7% → A 80% ⇒ D 39.1% 保護者 A 84.1% ⇒ A 80.9% 児童 A 94.6% ⇒ A 94.7%

**【改善策①について】**

給食委員会の食育と関連した活動については、まだ実施できていない状況である。食育への取り組みの重要性や必然性・期待感を職員がつよく感じているため、職員の評価が39.1%（D）となったと考える。一方、保護者と児童が（A）となっているのは、食育への取り組みを行っていないため、食育への取り組みに対する評価というよりもむしろ、給食や給食指導への評価だと考える。子どもたちの健康のために、**食育を早急に推進する必要がある**。そして、**食育を実際に行ってから3者からの評価をもとに改善策を見いだしていく必要があると考える**。

**【改善策②について】**

職員が食育を学ぶ機会を設定することができていない。このことが職員の評価39.1%（D）につながっていると考える。これに早急に取り組むことで、改善策①がスムーズに動き出すことができると考える。ただ、現状としては食育を学ぶ会を設定することは時間的にも耐震工事实施という状況的にも非常に難しい。そこで、**教務主任が中心となり、食育に関する資料を職員に配付するなど、食育を学ぶ方法を検討していく**。

**エ ⑯ 清掃活動の指導**

これまでも子どもたちの清掃活動への取り組みが問題になってきた。昨年より教師自ら、率先して清掃活動に取り組むことで、子どもたちが意欲的に清掃活動に取り組む姿を目にするようになってきた。子ども一人一人に目を向けると、短い清掃時間のなかでも、毎日目的をもって取り組む姿がある。本年度は、92%の子どもが清掃活動におおむねまじめに取り組んでいると評価している。しかし、保護者とのずれ感は大きい。取り組む質の向上が求められている。  
 清掃活動の必要性を子どもたちに考えさせ、常に目的をもって取り組む子どもが育てば、清掃活動だけでなく、学校生活全般にも大きく影響してくると考える。



⑯ 清掃活動の指導	

改善策	①学級や児童会活動を通して、清掃活動の意味や必要性を考えることができる子どもを育ていく。 ②附ぞくっ子タイムなどで、よりよい指導のあり方を互いに学び合う。 ③学級のみでの清掃活動への取り組みを見直し、常時ペア清掃活動など新たな取り組みを講じていく。 ④親子清掃活動など、PTAと協力しながら、清掃活動に積極的に取り組む態度を培う。																												
数値	設問 16 清掃指導 <table style="width:100%; border:none;"> <tr> <td style="width:10%;"></td> <td style="width:10%;"></td> <td style="width:10%; text-align:center;">平成24年度</td> <td style="width:10%;"></td> <td style="width:10%; text-align:center;">平成25年度目標値</td> <td style="width:10%;"></td> <td style="width:10%; text-align:center;">平成25年度数値</td> </tr> <tr> <td>教師</td> <td>A</td> <td>83.3%</td> <td>→</td> <td>A 85%</td> <td>⇒</td> <td>B 78.2%</td> </tr> <tr> <td>保護者</td> <td>C</td> <td>54.3%</td> <td>→</td> <td>B 70%</td> <td>⇒</td> <td>C 54.5%</td> </tr> <tr> <td>児童</td> <td>A</td> <td>92.2%</td> <td></td> <td></td> <td>⇒</td> <td>A 83.8%</td> </tr> </table>			平成24年度		平成25年度目標値		平成25年度数値	教師	A	83.3%	→	A 85%	⇒	B 78.2%	保護者	C	54.3%	→	B 70%	⇒	C 54.5%	児童	A	92.2%			⇒	A 83.8%
		平成24年度		平成25年度目標値		平成25年度数値																							
教師	A	83.3%	→	A 85%	⇒	B 78.2%																							
保護者	C	54.3%	→	B 70%	⇒	C 54.5%																							
児童	A	92.2%			⇒	A 83.8%																							

**【改善策①について】**

環境委員会による清掃道具の扱い方や片付けを取り上げた集会を実施したり、清掃時の巡回をもとにした担任による清掃活動への取り組みの指導を繰り返してきた。しかし①にあるように意味や必要性という点で、子どもたちへの投げかけが弱かったのではないかと考える。それが教師の78.2%（B）という評価に表れていると考える。そこで、担任が子どもたちに意義を伝える方法を探ったり、清掃時の目標を子どもたち自らが行うような取り組みを行っていき必要があると考え。一方、児童は83.8%（A）という評価になっていることから、児童は現在の清掃活動に対し、充分に行っているという認識にいる。保護者は児童の清掃の様子を教師よりもさらに厳しい目で見ている。この3者のずれを解消するために、改善策①～④についてさらに充実したものにすると同時に、清掃区域の見直しや人数割り振りも含め、子どもたちがより活動を行いやすいよう見直しを図っていければならないだろう。

**【改善策②について】**

ふぞくっ子タイムでよりよい指導のあり方を学び合うことができなかつた。普段の清掃の様子から、目的意識をもって清掃に取り組んでいる子どもたちはたくさんいる。その子どもたちに担任がなにかはたらきかけをしているのであれば、そのはたらきかけを共有することはわたしたちの財産になると同時に清掃を気持ちよく行う子ども、附小を愛する子どもの育成につながると考える。②の取り組みについては、生徒指導主事を中心に早急に取り組んでいきたい。

**【改善策③について】**

機会を捉え、学期に一度は実施することができた。83.8%という数字のなかにはペア清掃の取り組みを通し、低学年は清掃の意味や仕方を理解できた、高学年は低学年に教えることで清掃の意味や仕方を再確認できたと感じる子どもがいるであろう。その様子を見ている教師は、子どもたちの取り組みに対し、より高い目標をもっているため、教師の78.2%（B）という評価になっていると考える。子どもたちの現状をとらえ、今の状況の一步上をめざし、その目標設定を教師が子どもに示すといったスモールステップが大切ではないか。また、教師が清掃時間に子どもとともに清掃を行うだけではなく、目の前の子どもの実態に応じて伝えるべきことを判断するなどの取り組みが急がれる。

**【改善策④について】**

親子清掃時に見る子どもたちの様子と家庭での生活の様子から、保護者の評価が54.5%（C）と厳しい結果になったと考える。親子清掃の時間は長く、目的意識が明確ではないと、清掃を持続することは難しいと考える。また、清掃の意味や必要性が子どもたちのなかに落ちるからこそ、生活のなかでも自ら身の回りの整理整頓に心がけると考える。そう考えると、改善策①にある意味や必要性を子どもたちに伝えていくことこそがやはり大切ではないか。子どもたちに清掃の意味や必要性を伝えるにあたり、図書クラブの読み聞かせとの関連など、効果的方法について環境安全部を中心に見いだしていく必要がある。



#### (4) 教師による自己評価

【Aのなかでも評価の割合が90%以上だった項目】

設問1	附属小学校は、誇れる学校である。	→100%
設問2	附属小学校は、子どもの自主性や主体性を育む教育を実践している。	→91.3%
設問10	子どもは英語活動に楽しく参加し、英語に親しんでいる	→91.3%

職員集団が学校に誇りを持ち教育活動に取り組んでいることがわかる。自校の教育目標を理解し、常に子どもの自主性や主体性、育む授業づくりに取り組んでいることがわかる。英語活動については、英語部で年間指導計画を立案し、それに沿いながら活動を多く含んだ授業を展開しているためだと考える。

昨年度と比較し、90%以上だった項目はかなり減っている結果となった。これは教師が子どもたちにとってより質の高い教育活動を展開しようとしている意識の表れであるのとらえることができるが、その一方で時間確保の難しさや具体的方策を見いだせていないことなども考えられる。学年主任を中心としたミドルリーダーの存在が問われているのではないか。学校教育目標を理解し、それを具現するための具体的方策を示していく必要があるのかもしれない。

【C・Dと自己評価した項目】  本年度新規

設問5	教師は子どもの話をよく聞いたり、日記を読んだりして一人一人の子どもを大切にしている。	→C 60.8%
設問6	スクールカウンセラーやアイリスパートナーを活用し、より深く子どものことをとらえ、成長に役立てようとしている。	→C 52.1%
設問9	授業を通して、子どもは解決したい問題に対し、ねばり強く工夫をしながら解決する力が育っている。	→C 69.5%
<b>設問11</b>	子どもは、人に聞いたり、コンピュータや本などを使って調べていた知識を、学習や普段の生活のなかに生かそうとしている。	→C 56.5%
設問12	附属小学校での自校給食のおかげで、食事を作ってくれる人への感謝の気持ちが増えてきている。	→D 39.1%
設問15	子どもは、あいさつ、時間を守る、物を大切にすることなどの基本的な生活習慣が身についている。	→D 47.8%
設問17	子どもが安全に楽しく生活できるように、学校設備や教室環境が整えられている。	→C 69.5%

設問5、設問6については、子ども理解や子どもをとらえるという点では共通している項目である。設問5について、日記を読まない教員はいないはずであるので、問題は子どもの話をよく聞くという点ではないだろうか。そう考えると子どもの話を聞く時間を見いだせずにいるのではないかと思われる。教師が子どもをとらえ、大切にすることの重要性を感じているからこそその結果であると言えるが、**子どもに寄り添う時間の確保を含めた状況整備を行う必要がある**。設問9については、本校の進める研究実践にかかわる内容である。この評価が低いということは、教師が自信をもって単元に向かっていないと言える。**拡大教研や研究部との懇談会実施、教研アドバイザーの活用など、研究を取り巻く組織を充実させることで、実践者が自信をもって単元に迎えるようにしていく必要がある**。設問11については、**チャレンジ学習を有効に活用するなど、教師が意図をもった取り組みが必要ではないか**。設問15について、児童会や6年生が中心となり、自分たちの生活のなかから問題を見だし、その問題の解決に向け動き出している姿が1学期に見られた。そうした子どもたちをていねいに支えると同時に、子どものよさを認め、学級に広げる教師の意

識を高める必要性を感じる。設問17については、設問15と関連させた取り組みを行っていく必要がある。

#### (5) 児童による授業評価・満足度調査

【Aのなかでも評価の割合が90%以上だった項目】  昨年度はなかった

設問1	附属小学校は、じまんでできる楽しい学校である。	→93.0%
設問4	毎日の授業は楽しい。	→90.7%
設問7	朝のスピーチで、上手に話をしたり、友だちの話をよく聞くことができよう になってきた。	→90.7%
設問12	作ってくれる人への感謝の気持ちをもって、おいしく給食を食べている。	→94.7%
設問15	あいさつ、時間を守る、物を大切にすることができるようになった。	→91.6%

多くの子どもたちが、附属小学校を誇りにするとともに、学校へ行くことや授業を楽しむにしていることがわかる。授業改善を今後も推進していくとともに、設問7のような相互理解の場は、子どもたちのよりよい人間関係の形成、社会性の向上において重要である。今後も「聴いて応える姿勢」を大切に育てていきたい。設問12の結果から、子どもたちの意識のなかに食事を作ってくれる人に対する感謝の念が確実にあるということになる。その気持ちをどのように表出させていくのか、その気持ちを自分の食の実態や検討とどのように結びつけていくのかを考えていく必要があるだろう。設問15の基本的な生活習慣については、数値から教師・保護者との意識のずれを感じるが、保護者の評価も若干の上昇傾向にある。つまり、教師及び保護者の地道な取り組みが目に見える形に成りつつあると考えられる。今後も基本的な生活習慣に対する取り組みをねばり強く続けていくと同時に、校外における基本的な生活習慣やマナーの向上にも目を向けていく必要がある。さらに、子どもたちの基本的な生活習慣に対する意識の底上げを図ることも必要だろう。

#### 【C・Dと評価した項目】

設問6	附属小学校では、アイリスパートナーやスクールカウンセラー（五十嵐先生）に楽しかったことや、困ったことなどを話したり相談したりできる。	→C 61.2%
設問17	学校や教室のなかは、いつもきれいになっていて生活しやすい。	→C 58.1%

設問6の結果の解釈として、子どもたちが相談を必要としない状況にあると考えれば、喜ばしいことである。相談ポストに投函されたのも、本年度2度であった。その2度も相談をするかどうかをアイリスパートナーを通して確認したが、必要ないということであった。子どものわずかな変化を見逃さず、必要に応じて即時対応できるような現体制を継続すること、さらにはアイリスパートナーの在校時間の延長など、大学にはたらきかけを行っていく。設問17について、この結果の裏には、教室が自分たちの生活の場所であり、教室は自分たちが創り上げるものだという認識の弱さがあるのではないか。係活動のあり方、掲示物の作り方ははじめとして、子どもたちが自ら生活にかかわっていくことができるような支援を講じていきたい。

#### (6) 保護者による満足度調査

【Aのなかでも評価の割合が90%以上だった項目】  昨年度はなかった

設問1	附属小学校は、子どもが楽しく通え、誇れる学校である。	→97.6%
設問2	附属小学校は、子どもの自主性や主体性を育む教育を実践している。	

設問3 教師は、授業や行事において、人とのかかわりを大切にして、子どもの指導に当たっている。	→97.9%
設問4 附属小学校は、楽しく学べる授業づくりの工夫がされている。	→97.2%
設問18 ホームページ、学級・学年だよりなどで校内のできごとを知ることができる。	→94.2%
	→90.2%

設問1・2・3・4については、例年と同様で高評価である。本校の自主性や主体性を重視した教育を理解し、誇りに感じていただいていることがわかる。今後も自信をもって進めていきたい。子どもたちの日頃の様子を見ていただく機会をさらに設定したい。

設問18については、本年度のホームページ更新の頻度が昨年引き続き頻繁に行われている。どの家庭にもインターネットやパソコン・タブレットが普及している現代、ホームページを閲覧することが当たり前になっている。今後もこうした取り組みを継続し、学校の様子を公開していくとともに、双方向の情報交換を行うための方策を見いだしていく。

### 【C・Dと評価した項目】

設問16 子どもは、そうじがよくできる。	→C 54.5%
----------------------	----------

<昨年度の改善対策と今年度の結果>で記述済み。

#### (7) 成果と課題

ア 設問1・2については、教師・保護者・児童ともに90%をこえA評価となっている。教師が、本校の教育方針、教育活動を自信をもって教師は進めており、保護者にもおおむね理解されていると考える。ただ、それぞれの項目に「あてはまらない」と考える子どもたちや保護者の意見を見逃すことなく、より充実した教育活動をめざす必要がある。さらに、設問5・6・11の教師評価が低いことは、教育活動をより充実させたい教師の強い願いの裏返しと考える。設問20について3者ともA評価であったことと重ねて考えると、今後も学校評価をもとにしたPDCAサイクルを生かし、教育活動を進めたい。

イ 学校設備や教室環境の充実について、児童の評価が昨年度よりも大きく低下している。子どもたちは学校のなかの様々な場所で生活するなかで、子どもたち自身が問題意識を見いだしている現れであると考え。設問5と合わせ、まずは子どもたちの声に耳を傾け、問題を収集すること、その上で子どもたち自身が解決できる問題と大学にはたらきかけなければならない問題とに分類することが大切である。子どもたち自身が解決すべき問題については、委員会活動などとタイアップしながら教師が仕掛けていく必要があるだろう。大学にはたらきかけなければならない問題については、校務主任を通して働きかけを行うとともに、理事訪問・監事訪問など大学関係者が来校する際に現場を見てもらうようなはたらきかけをしていく。

ウ アイリスパートナーについては、児童の評価は昨年に続きCのままであり、保護者の評価はAからBに下がっている。しかし、児童の評価は昨年よりも約8%上昇している。このことから、アイリスパートナーやスクールカウンセラーの存在意義は児童・保護者に周知されていると考える。今後はスクールカウンセラーについては、講演会を行うなど、五十嵐先生の魅力や考え方を保護者に周知していきたい。また、アイリスパートナーについては、先述したように在校時間やクラスへのかかわり方を含め、より多くの児童がアイリスパートナーと接することができるような方法を見いだしていく。

エ 設問12・15について、教師の評価がDとなった。考え方によっては、食育及び基本的な生活習慣については、本校の弱点であると言える。食育については、自校給食を生かし、作り手と食べる側の双方向のコミュニケーションを柱とした授業・行事が展開できるよう、児童委員会と保健衛生指導部がタイアップし、知恵を絞り取り組んでいく。また、基本的な生活習慣への取り組みは、執行委員や高学年を中心に子どもたち自らが問題を見だし、解決できるよう、教師が仕掛け、支えていく必要がある。

オ 本年度の新たな設問情報の活用について、保護者・児童の評価はAとなった。しかし教師はC評価となっていることから、活用に対する取り組みの不十分さが伺える。チャレンジ学習を活用したり、実践のなかで活用部分での問題解決学習を展開するなど、創意工夫のある取り組みをめざしていきたい。

### (8) 改善策

#### 【⑰ 学校施設・設備・教室環境への留意】

一人一人の子どもが、楽しく安心して学校生活を過ごすことができることを私たちは望んでいる。また、学校は子どもを安心して通わせられるという保護者との信頼関係を築いていくことが大切である。そのためには施設設備・教室環境への留意は欠かすことができない。

本校の子どもたちは、明るく、活発に学校生活を送っているように見える。その反面、怪我が非常に多いことが気になる。危険回避能力が高くないことも考えられるが、廊下や教室を走っていたことが怪我の原因となるなど、自分自身が注意することによって防ぐことができる怪我もある。子どもたちの声に耳を傾けるとともに、教師が子どもたちの生活を把握すること、そして、把握した問題について、子どもたち自身が解決できる問題と大学にはたらきかけなければならない問題とに分類することが大切である。子どもたち自身が解決すべき問題については、委員会活動などとタイアップしながら教師が仕掛けていく必要があるだろう。大学にはたらきかけなければならない問題については、校務主任を通して働きかけを行うとともに、理事訪問・監事訪問など大学関係者が来校する際に現場を見てもらうようなはたらきかけをしていく。



① 学校施設・設備・教室環境への留意																			
目 標 値	<p>設問17 子どもが安全に楽しく生活できるように、学校設備や教室環境が整えられている。</p> <table style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <tr> <td style="padding-right: 10px;">教 師</td> <td style="padding-right: 10px;">C</td> <td style="padding-right: 10px;">69.5%</td> <td style="padding-right: 10px;">→</td> <td style="padding-right: 10px;">A</td> <td style="padding-right: 10px;">80%</td> </tr> <tr> <td>保 護 者</td> <td>A</td> <td>83.2%</td> <td>→</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>児 童</td> <td>C</td> <td>58.1%</td> <td>→</td> <td>B</td> <td>75%</td> </tr> </table>	教 師	C	69.5%	→	A	80%	保 護 者	A	83.2%	→			児 童	C	58.1%	→	B	75%
教 師	C	69.5%	→	A	80%														
保 護 者	A	83.2%	→																
児 童	C	58.1%	→	B	75%														
改 善 策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもたちの声に耳を傾け、危険問題箇所の把握を行う。教師の安全点検を学期に二度実施するなど、回数を増やす。</li> <li>・子どもたち自身が解決すべき問題については、委員会活動などとタイアップしながら教師が仕掛け、改善に向かう。大学にはたらきかけなければならない問題については、校務主任を通して大学に働きかけを行うとともに、理事訪問・監事訪問など大学関係者が来校する際に現場を見てもらうようなはたらきかけをしていく。</li> <li>・清掃活動と関連づけながら、子どもたち自らが環境を整えようとする意識の高揚を図る。</li> </ul>																		

【⑥ 子どもの理解（スクールカウンセラー・アイリスパートナーを含む）】

子どもたちに寄り添い、理解し、支えていくことは、わたしたち附小職員にとって大切な営みである。南門の門柱に掲げられている「今日の一歩 夢への一歩」を念頭に置き、未来を築く子どもたちにとって学校が楽しさあふれる場所にしていかねばならない。そのために、人間関係につまずいたり、特別に支援を必要とする子どもを支え、育てていくことを大切にしていきたい。



② 子どもの理解（スクールカウンセラー・アイリスパートナーを含む）	
目標値	<p>設問 6 スクールカウンセラーやアイリスパートナーを活用し、より深く子どものことをとらえ、成長に役立てようとしている。</p> <p>教師 C 52.1% → B 75%</p> <p>保護者 B 76.0% → A 80%</p> <p>児童 C 61.2% → B 75%</p>
改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保護者を対象とした、五十嵐先生の講演会を開催する。</li> <li>・アイリスパートナーが在校する日について、ある学級に特定して入るのではなく、どの学級ともかかわれるようにする。</li> <li>・アイリスパートナーの在校時間について、大学関係者と交渉し、できる限り長時間子どもたちとかかわれるようにする。</li> <li>・スクールカウンセラーやアイリスパートナーと担任が情報交換できるよう、会議等の設定時間を一考したり、面談する担任を定期的に設定したりする。</li> </ul>

【⑫ 自校給食がもたらす子どもへの影響（食育）】

子どもたちの給食の実態をみると、簡単に給食を残したり、偏った栄養摂取をしている子どもがいる。しかし、栄養士さんは、栄養バランスや歯の成長、地域食材の活用など、毎日の献立に意図をもって作ってくださっている。

常に温かい給食を取っている子どもたちは、給食を作ってくれている人への感謝の気持ちは忘れてはいない。しかし、給食を通して自らの健康を考えたり、食材と地域とのつながりを考えたりするなどの子どもの姿はあまりない。食育の生きた教材として自校給食の活用を検討していく必要がある。



③ 自校給食による食育の充実	
目標値	<p>設問 12 附属小学校での自校給食のおかげで、食事を作ってくれる人への感謝の気持ちが育っている。</p> <p>教師 D 31.9% → A 80%</p> <p>保護者 A 80.9%</p> <p>児童 A 94.7%</p>
改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・栄養士や調理員との双方向コミュニケーションを中心とした食育の授業を、担任や学年で立案し、実践する。そして、自分たちの食に対する意識や健康、栄養士や調理員とのかかわりといった視点で、委員会活動につなげていく。</li> </ul>

- ・先進的な取り組みの事例を職員に紹介するなど、食育を学ぶ機会を設定する。
- ・家庭や父母教師会と連携した取り組みを、保健衛生指導部（教務主任）で探る。

#### 【⑮ 基本的な生活習慣（あいさつ・時間・ものを大切にする）の定着】

ものや情報があふれ、使い捨て文化が定着している現在、ものを大切にする意識に弱さを感じる子どもたちが増えてきている。また、自由な校風と裏腹に、時間を気にすることなく生活したり、自分のことに夢中になり、あいさつができない子どもたちもいる。やがて社会に出て行く一人の人間として、この時期に基本的な生活習慣を身に付けておくことは、社会で認められる事につながっていくと考える。学校内外を問わず、ふぞくっ子が社会から求められる人材となるよう、わたしたちがねばり強く取り組んでいきたい。



#### ④ 子どもたちの基本的な生活習慣を育む

目 標 値	設問15 子どもは、あいさつ、時間を守る、物を大切にするなどの基本的な生活習慣が身についている。 教師 D 47.8% → B 70% 保護者 B 76.6% → A 80% 児童 A 91.6%
改 善 策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・委員会で生活の実態を把握，集計するなど，子どもたちが自分たちの生活を客観視できる取り組みを行う。</li> <li>・高学年については，積極的に地域に貢献できる活動を推奨していく。</li> <li>・委員会活動と連携し，自らの手で生活改善していくことができるよう，代表委員会や児童総会で話し合うようにする。</li> <li>・登下校での子どもたちの様子の把握を行いながら，必要に応じてその場で指導を行うなど，生きた指導に心がける。</li> </ul>

#### 【⑩ コンピュータや本から得た情報の活用能力】

コンピュータや本などから得た情報(知識)を、実際の生活のなかで活用することは、わたしたちがめざしている生活教育と切っても切れない深いつながりがあると考えられる。生活教育は、実践だけでは成り立たない。子どもたちの生活全ての場面において、生活に生きてはたらく力を養うことが大切である。子どもたちにとって意味のある教育活動を展開していきたい。



#### ⑤ コンピュータや本から得た情報の活用能力

目 標 値	設問11 子どもは、人に聞いたり、コンピュータや本などを使って調べていた知識を、学習や普段の生活のなかに生かそうとしている。 教師 C 56.5% → B 70% 保護者 A 82.4% → A 90%
-------------	---

児童 A 87.3%

改善策	<ul style="list-style-type: none"><li>・チャレンジ学習について，基礎基本の定着を図るものと活用に重きを置くものの違いを明確にし，それを子どもたちが理解した上で行えるようにする。</li><li>・チャレンジ学習の成果を，保護者会や懇談会の場などを活用し，保護者に伝えることができるようにする。</li><li>・実践や普段の授業のなかで，活用場面を問題解決学習で行ったり，実践に加えて明確な願いをもったくすのき学習を確実に行うなど，授業改善を図る。</li></ul>
-----	---